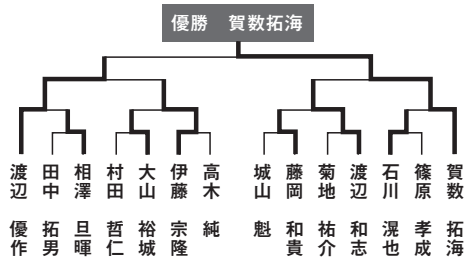


■一般無差別級の部  
優勝 賀数拓海 準優勝 渡辺優作 第3位 伊藤宗隆 第3位 渡辺和志



達しつつある。試合開始早々、体重を乗せた突きで攻めてくる渡辺に対し、打ち負けることはない。むしろじわじわと間合いを詰めていくのは賀数だった。下段から中段へと攻撃を散らし、飛び道具の飛び後ろ廻し蹴りを放つ賀数。しかしこれは不発に終わる。

その後も中段と下段を中心に攻める賀数の手数が落ちることはなく、次第に渡辺の軽快な動きが影を潜めていく。終盤は完全に賀数のペースに見えたが、勝負は判定に持ち込まれる。3人の副審が賀数を支持。賀数が全北陸大会二度目の優勝をはたした。

「試合前は緊張していました。でも新潟の人は優しいので、会場もとても居心地が良かったです。今まで南里師範をはじめ、家族も含め、いろいろな人が僕のために時間を割いてくれたので、絶対に負けられない気持ちがありました。ブロック大会では何回か優勝しましたが、今まで全日本では結果を残していないというのが現実です。全北陸大会で優勝して、全日本大会でも結果を残すというのが目標ですので、この勢いで結果を残したいと思います」

優勝の副賞である米俵を手に入れるのも二度目の賀数だが、激戦の疲れからか、俵を担ぎ上げることはできなかった。だが、全日本大会に向けて決意を新たにしたい。

## 第4回 全北陸 空手道選手権大会

2017年9月17日  
新潟市東総合スポーツセンター



一般無差別級の部  
＜東京東支部＞ ＜世田谷・杉並支部＞  
○賀数拓海 vs 渡辺優作 ×  
本戦 3-0



夢限大の可能性へ。  
自居野不動産 校北陸当田

1 トリッキーで派手な攻撃も賀数の持ち味。2 体格に似合わぬ軽快でスピーディーな突きを出す渡辺。3 相手のガードがない箇所を的確に攻める賀数。4 105kgの体重を突きに乗せて攻める渡辺



## 一昨年の王者・賀数拓海が王座返り咲き！ 世田谷・杉並支部注目の新鋭也大活躍

Text & Photos / 神田勲

今年で4回目となる全北陸大会。北陸から世界へという目標をかけた、回を追うごとに選手層・レベルとも厚く高くなってきている。中でも一般無差別級の部は一昨年の王者で東京東支部の賀数拓海を中心に、世田谷・杉並支部からは渡辺優作、渡辺和志といった若手の新鋭、地元である新潟支部からは大山裕城がエントリ。過酷なトーナメントの火ぶたが切って落とされた。

そんな中で、やはり圧倒的な強さを見せたのは賀数だった。賀数は準々決勝で世田谷・杉並支部の石川晃也を退け、準決勝では渡辺和志と対戦。勢いに乗り前に出る渡辺に対し、突きからの下段蹴り、ヒザ蹴りへとつなぐコンビネーションで圧倒。判定勝ちを収め、決勝に進出した。

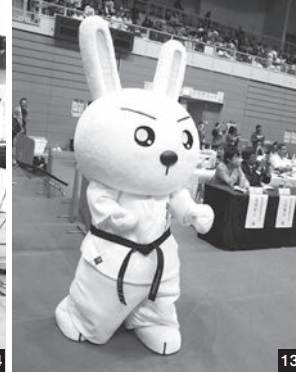
賀数の反対側のブロックから勝ち上がってきたのは、渡辺優作。やはり世田谷・杉並支部の新鋭だ。渡辺は体重100kg超という体格に似合わず、軽快な動きを持ち味としている。一回戦はシードの後、準々決勝、準決勝と堅実に勝ち上がり、決勝に進出。賀数と対戦することとなる。

決勝戦。身長は4cmほど賀数が上回るものの、体重では24kgも渡辺が重い。さすがの賀数も苦戦するかと思われた。

しかし、一昨年の全北陸大会や、昨年の埼玉県大会などで優勝経験のある賀数は、すでにベテランの域に



6 型団体の部決勝戦。優勝は新潟B。7 高校生男子の部決勝戦。新潟支部の中野雅大(右)が優勝。8 シニア上級の部決勝戦。東京東支部の関周作(左)が優勝。9 選手宣誓は新潟支部の大山裕城。10 金田和美師範のルール説明で、実演を行なったのは佐野英雄参段と久野浄英参段。11 古川章師範による演武。折れない5本のバットを折れるまで蹴り続け、絶対にあきらめないという新極真空手の魂を体現した。12 少年部も瓦割りを披露。13 少年部の演武に合わせ、新潟支部のマスコットキャラクター・ピーくんも型を披露。14 演武は生バンドの演奏に合わせて行なわれた。15 第6回全世界ウエイト制大会に出場した長谷川達矢、山本和也、入来建武、長谷川梨佳、多田耀成が挨拶。花束が贈呈された。



※各クラスの入賞者は69-72ページの「RESULTS」に記載

一般女子(35歳未満)フルコンタクトの部では、新たなヒロインが登場した。神奈川県横浜支部の長尾未桜だ。長尾は一回戦、東京東支部の小嶋夏鈴を判定で下すと、続く準決勝ではベテラン中のベテラン、砂川久美子と対戦。これも判定で下して決勝進出。

決勝戦は東京東支部の遠田朝香と対戦。派手さこそないものの、重厚感あふれる下段と突きで遠田を攻め立てる。遠田は回り込みながら反撃のチャンスをつかうが、長尾の圧力に押され気味となる。

勝負は判定となり、副審二人と主審が長尾を支持。長尾の初優勝となった。

また、全北陸大会の特徴といえば、通常の試合では見られないほど高さのあるマットと生バンドによる演奏が行なわれた。中でもバット折りは圧巻だった。5本重ねたバットがなかなか折れず、通常ならあきらめてしまいかねない状況にもかかわらず、何度も何度もスネをぶつける古川師範。まるで大木が折れていくかのよう。最後に5本のバットが音をたてて折れた。新極真会のキャッチフレーズとも言える「あきらめない心」を体現した。



一般軽量の部  
＜芦原会館＞ ＜芦原会館＞  
○佐藤豪海 VS 遠藤紘史×  
本戦 5-0



## 他流派の佐藤豪海が連覇！ 二年連続の同門決勝

1 一般軽量の部決勝は同門対決となったが、手数と積極的に大技を狙った佐藤が判定勝利。2 遠藤は回り込みながら突きを中心に攻めるが及ばず。3 準決勝第一試合。遠藤が茨城県中央支部の古徳大輔を破った。4 準決勝第二試合。佐藤が総本部道場の久加晴英を破った。5 一般女子(35歳未満)フルコンタクトの部は神奈川県横浜支部の長尾未桜が東京東支部の遠田朝香を破った

昨年の決勝は他流派兄弟対決という結果に終わった一般軽量の部。今回も昨年優勝した芦原会館の佐藤豪海がエントリー。兄の佐藤大海は出場を見送ったものの、今年も弟の豪海があげまくった。

豪海の一戦はシード、準々決勝では新潟支部の中野幸大を退け、続く準決勝では総本部道場の久加晴英に判定勝ち。キレのある突きで決勝まで一気に駆け上がった。

反対側のブロックから上がってきたのは同門のベテラン・遠藤紘史。昨年の決勝と同じく、芦原会館同士の決勝となる。

ほぼ突きのみで遠藤のボディを攻める豪海に対し、遠藤は突きに下段を織り交ぜ応戦。そこへ奇襲とも言える豪海の内廻し蹴り。豪海は短い間合いから出す蹴りが絶妙だ。間合いを詰めて鎖骨のあたりを狙ってくる豪海の突きに、遠藤も攻めあぐねる。

ラスト1分の声がかかると両者とも手数が増えたが、時おり豪海が見せる胴廻し回転蹴りが、判定にどう影響するのか。勝負は判定に持ち込まれる。主審・副審とも豪海を支持。豪海が連覇をはたした。

試合後豪海は、「JFKO全日本大会では二日目まで残ったのですが負けてしまってたんですけど、突きの強化を中心に稽古を積みました。来年のJFKOでも上位に食い込みたいです」と力強いコメントを残した。